アカソ *Boehmeria silvestrii* (Pamp.) W.T.Wang

イラクサ科　Urticaceae

1.　利用対象部位：靭皮繊維

2.　組織形態：

雌雄同株の多年生草本で高さ 1.5m ほどになる。茎は下部で太さ 1cm 程度、断面円形、上方で丸い四角となり、髄は中実で髄腔とはならない。表皮は 1 細胞層でクチクラは薄い。下表皮は数細胞層で、構成細胞は比較的大きく、細胞壁もあまり肥厚しない。その内側に数細胞層の薄壁で大形の細胞からなる柔組織があり、更にその内側に靭皮繊維がある。靭皮繊維は皮層と一次篩部の間に発達するが、多数の柔細胞と混在していて、繊維細胞は断面多角形、単独あるいは 2〜10 細胞、多くは 2，3 細胞が互いにくっついて繊維細胞塊となるが、アサのような大きな塊とはならない。繊維細胞は一次維管束のある位置の外側に形成され、ほぼ全周的に形成されるが、維管束間部分では途切れる。一次組織の分化に引きつづいて形成層が活動し、二次篩部を作るが、二次篩部には繊維組織は形成されない。

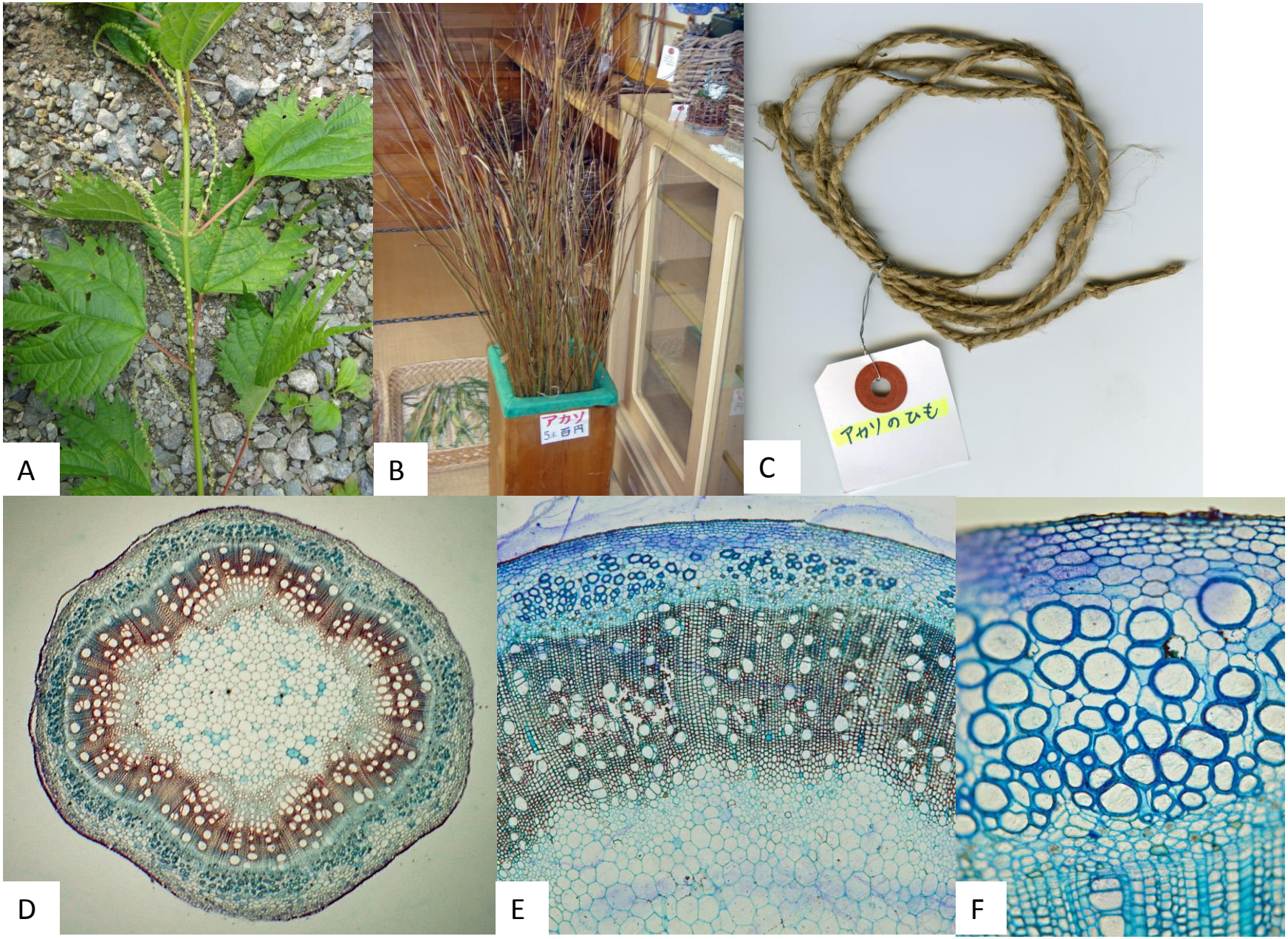
民俗事例ではアカソは 7 月頃に茎を刈り取り、乾燥させ、繊維をとる。カラムシ同様、繊維細胞は 2〜数細胞はくっついて小さな繊維細胞塊になってはいるものの、繊維細胞塊の間には柔細胞があるので干した茎を敲いて繊維を採ると繊維細胞はバラバラになる。

3.　利用例：糸、織物など

4.　遺跡出土遺物：布目（1992）は福井県の鳥浜貝塚（縄文時代前期）の「アンギン様編物」および縄、山形県高畠町の押出遺跡（縄文時代前期）の「アンギン様編物」、金沢市の米泉遺跡（縄文時代後期）の「アンギン様編物」などを「アカソ」と報告している。鈴木ら（2017）は青森県に目屋村の川原平（1）遺跡（縄文時代晩期）の漆漉し布 3 点について、カラムシ、アカソ、イラクサなどを含めた意味での「イラクサ科の繊維」と報告している。

鈴木三男・能城修一・小林和貴・佐々木由香 2017.　「木質遺物・繊維製品の素材植物同定」　青森県埋蔵文化財センター『川原平

（1）遺跡Ⅷ』



A:アカソの茎葉（山形県最上町）。B:繊維採取用に乾燥させた茎（福島県檜枝岐村）。C:アカソの紐。D:アカソ茎の横断面。丸みを帯びた菱形。E:茎横断面の拡大。表皮、下表皮、皮層の下に靭皮繊維がある。F:未だ「未熟」な靭皮繊維。靭皮部は繊維細胞と柔細胞からなり、繊維細胞は単独あるいは2～10細胞程度が集合。繊維の細胞壁は未だ充分に厚くなっていない。